

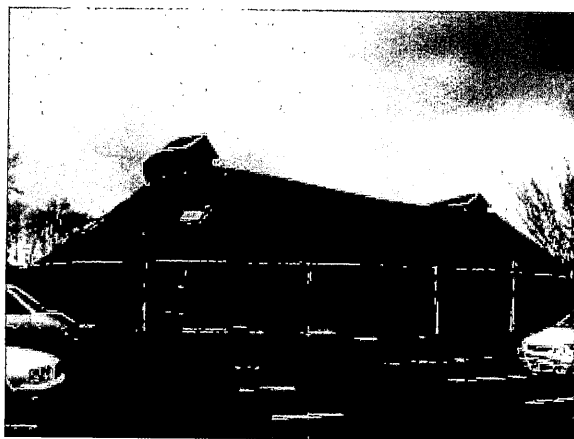
2006年度現地研究会 見学概要

森 岡 理 紀 (北海道農業研究センター 資源化システム研究北海道サブチーム 主任研究員)

本年度は12月に北海道畜産学会・北海道家畜管理研究会・北海道草地研究会の合同によるシンポジウムが開催されることになり、例年行っている本研究会単独でのシンポジウムは行わないこととなった。したがって、それに変わる試みとして現地見学の後に「ミニシンポジウム」を設定し、見学内容の議論を深めることとした。この項では、現地見学の内容について紹介する。

1. ピュアモルトクラブハウス

11月30日木曜日の10時にJR新得駅に集合、バスは鹿追町内を經由して、町営の青少年複合施設ピュアモルトクラブハウス（写真1）へ到着し、町役場の大井氏、酪農家の奥秋氏（お二方ともシンポジウムの演者である）からご説明をいただいた。

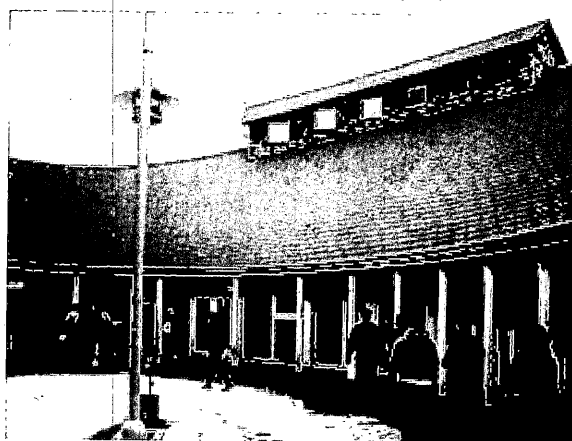


クラブハウス外観

同クラブハウスは、約5億円をかけて平成10年に建設された。写真2のような大小の集会場所を持つ交流研修施設のほか、長期滞在者向けの研修滞在施設が併設されている。シンプルに言うならば多目的の青少年会館ということであるが、その形状や設備には、鹿追町および関係者の思いが込められている。



オープンホールでの講演



レンガ敷きの中庭

外観とロビー部分から見て取れるように、クラブハウス自体は楕円形をしている。さらに内側には中庭（写真）があり、居住部分はドーナツ型の形状となっており、人が集う際の「車座」をコンセプトのひとつに設計されているとのことであった。

この中には、多数が集まることのできるホールのほか、2階部分には小さな会議室が数多く配置されている。しかし、部屋を壁で区切ることなく木組みの仕切りを用いていること、1、2階が吹抜けでつながっていること、また円周の反対側も中庭を通じて見えることなどから、各所が孤立・

閉塞している感覚がない。各箇所がそれぞれの機能を持ちながらも、同時に建物全体としてひとつの連続した大きな空間、いわば居間のような形をなしているとも見る事ができると思われた。なお設計は道都大学教授の倉本龍彦氏によるもので、1999年には北海道赤レンガ建築賞、2004年には公共建築賞優秀賞を受賞している。

併設の女性専用研修滞在施設ピュアハウス（写真）は、交流研修施設とは渡り廊下で接続されており、10戸の入居が可能である。各戸バス・トイレ・キッチン等が完備されており、オートロックおよび常駐の警備員によりプライバシーも確保されている。簡単な宿泊程度であれば交流施設のほうでも可能であるとのことであるが、特に年若い研修生の長期滞在においては、しっかりした居住施設を備えていることは滞在する側にも迎える側にも大きなメリットといえるだろう。



併設の研修滞在施設（ピュアハウス）

このような若い層を迎える上での考え方は、鹿追町全体を貫いているようである。クラブハウス外でも、町内には就農者が安く住める町営アパートを設置するなどしており、町のメインストリートがシャッター通りになっていないという説明にも頷けるものがあつた。

2. 浅野牧場

2番目の見学先は、雇用を取り入れた酪農を実践している浅野牧場である。経営者の浅野澄夫氏は、雇用によって農業経営の合理化を図ることを目的として掲げる、鹿追町ファーマーズスタッフという団体の会長も務められており（先にピュアモルトクラブでご説明いただいた奥秋氏もこの団体の事務局を務められている）、鹿追町全体の状況についてもお話をいただくことができた。



浅野牧場

浅野牧場では当初、ピュアモルトクラブハウスの研修滞在施設ができた際に、研修生を受け入れないかという話が町からあつたという。それまでも短期で人を入れたことはあつたそうだが、研修生であれば雇用側としての練習になるということ、また将来的に家族に給料を支払う目安をつかむということもあり、長期雇用の受け入れを決めたとのことであつた。それから、増員と待遇改善の面を考へて牛舎の増床などを行い、以降は常駐のスタッフ2名に加え、酪農学園大学の紹介で短期研修と大学の実践学コース学生の受け入れを行っている（息子さんも酪農学園大学の卒業生である）。その結果、研修生受け入れ当初にくらべ、売り上げや給与支払い、浅野氏自身の所得も上がっているとのことである。浅野氏が牧場を受け継いだ代では、親から小遣いという形でお金をもらっていたが、次の代には自信を持って酪農の良さ、農業



浅野牧場牛舎

の良さを言えるような取り組みをしていきたいためにここに至ったのではないかと述べられた。実際に受け入れを続けてきた経験では、雇用を開始した当初は、単純に人が来て働いてもらえばいいという感覚があり、被用者側にも牧場だったらどこでもいいという感覚があったという。それでも従業員とのトラブルはほとんどなかったが、最近になって、目的を持って入ってくれる人が良いと思われるようになったそうである。

従業員が定着しにくい問題（一般的な問題として）については、未知の場所にやってきた従業員の抱えがちな問題を認識しつつも、一方で受け入れ牧場自体に長期的な雇用についてのしっかりとした展望がないのではないかとという考えも示された。鹿追町における雇用割合の高さに関しては、休みや自動車の貸し出し、住宅環境などの面での雇用形態のよさを理由に挙げられた。鹿追では、牧場によって違いはあるものの4週5休というところは存在し、休みも関係なく常に車の貸し出しをしているという形のところもあるという。住宅については敷地のなかに従業員住宅を持っている牧場もあり、町の公営住宅をこちらで探して住んでもらうようにもしているとの話であった。

いわゆる従業員ではなく実習生については、寒い中うちに来てもらっても何もないという冗談を交えながら、スタッフという形で入ってもらえば

月給も支払えるし、それ以外に実習と変わらないぐらい覚えてもらうこともあるので、実習生という形ではなくスタッフで入った方がいいという考えを説明された。また、どこの牧場でも経営が成立している限り特別な牧場というものはなく、常に自分の所にあったやりかたでやっていけるような形がベストであり、実習も自分の地元の形に合った、あるいは自分の方向性をもった中で入っていけばいいのではないかと述べられ、雇用者側の立場についても被用者側の立場についても、終始自主性を重要視されているようであったのが印象的である。

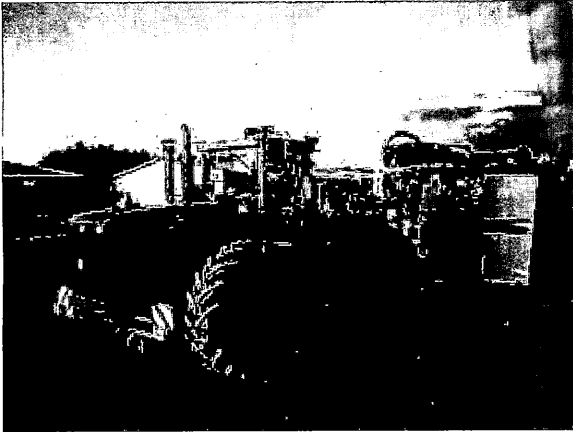
なお、飼料生産については、以前は大きな機械を5軒で共有して作業していたが、各牧場によって規模や作業時間が違う中で一緒に考えをもってやっていくのは苦しく、現在では100%コントラクターに委託されているという。初年度はコントラの職員も慣れておらず委託側も大変であったが、その後はスムーズにいったおり、デメリットはほとんど感じないとのことであった。

3. JA鹿追町コントラクターセンター

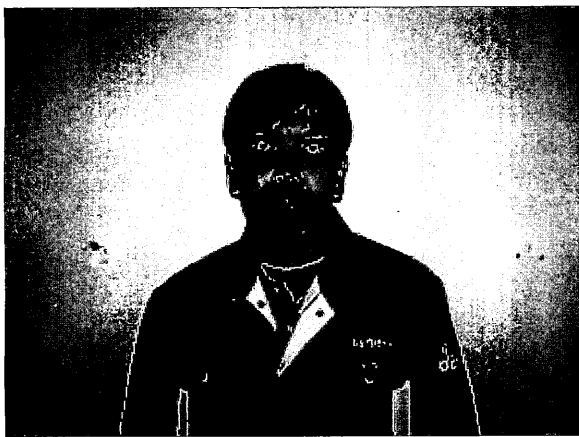
当初予定ではJA鹿追町のコントラクターセンターの他、肥料配合工場も見学する予定であったが、参加人数が多く、コントラクターセンターは車窓からの見学のみで、肥料工場については、範囲を広げ鹿追町全体での施肥に関する取り組み状況をシンポジウム前にご説明いただくことになった。

車窓見学では、同乗して案内をしていただいたJA職員の方の言うとおりの、日本有数の規模を持つ機械群に圧倒されるばかりであった。年間牧草・デントコーン合わせて5000ha、鹿追町内の約半分の収穫を行っているほか、2000ha分の糞尿散布から、播種作業の類まで酪農家の作業全般を担当しているとのことである。

前項の浅野牧場では飼料生産を全てコントラ



コントラクターセンター



JA 鹿追町営農部農産課今田氏

クターに委託しているという話であったが、このような全面委託を行う農家は20戸ほどあり、関連する機械も売却済みで保有していないそうだ。センター側の料金のシステムには、セット委託、部分委託、全面委託という3段階があり、この全面委託の場合、春に一度申し込みをした後、ほとんどの必要作業は電話連絡の指示によって行われるとのことである。

見学に続いて、JA鹿追町営農部農産課の今田氏から「鹿追町での堆肥利用による土作り施肥管理体制」と題したお話をうかがった。

鹿追町においては、酪農家と畑作の圃場を交換しながらの交換耕作が昭和50年頃から進められたが、その中で堆肥の利用が大きくなっている。この理由として挙げられたのは、以下のような3点である。

- この頃は畑作の小麦が多くなかったので輪作体系は非常に厳しかった。その中で地力対策が求められ、有機物が要求されていた。
- 混合農家から酪農専業への移行が進み、かつ大規模化した。その結果雄仔牛の肉牛事業が拡充し、バーク堆肥が多く供給されるようになった。
- ただ酪農専業化が進んできたといっても、混同から専業に変わる過程で、高価な機械の導入など苦勞をする局面があった。しかし、平成5年にコントラクター事業が始まることで専業化が更に進み、規模も大きくなると同時に糞尿も大量に生産されるようになった。

さらに、平成5年には大冷害があり、冷害に強い農業体質の育成ということで小麦跡地への本格的な堆肥の投入事業が平成6年に始まったとのことである。

しかし、ここで地力が上がったことによる問題が表れた。一部の圃場で土壌の肥沃化が進み、作物が出来すぎるといった現象が見受けられるようになってきたのである。これに対し、平成13年に営農指導対策協議会に肥料の見直しのための土壌分析プロジェクトを設置し、平成14年には、全戸全筆対象に土壌分析を行うとともに、同時にプロジェクトチームで独自に施肥設計プログラムを作成、メンバーで戸別施肥相談を開始した。

施肥相談は、年2回土壌を集中的に集めて分析した上で、窒素を主な基準に施肥設計システムを用いるが、堆肥による蓄積量にも違いがあるため、ある程度本人を目の前にして昨年の作物の生育などについて聞き取り調査をしながら農家本人が納得するような施肥の体系をとるという形で進めているという。また、肥料設計は、土壌分析のデータを活用して統計処理して行っているが、毎年見直しにかけて肥料工場と連携を取りながら銘柄の変更を行っているそうだ。

当日見せていただいたスライドでは、このような細かな施肥設計の結果、減肥とそれに伴うコスト削減の効果のみならず、出荷作物の中に占める一級品の割合や、糖分含有量などが如実に上昇しているというデータが示された。また現状でも施肥設計システムは進化を続けているようで、マッピングシステムを取り入れ、より本人の話が聞きやすいように圃場地図と合わせた施肥設計が可能となっているという。将来的には、化学肥料投入量の削減や蓄積窒素に応じた施肥基準の開発、あるいは堆肥散布時の運搬コスト削減など、いっそうの効率化を図るための検討を始められているようであった。

他、会場からの質問への回答として、バイオガスプラントの消化液については試験中であること、スラリー施用については十分把握していないが、利用者も増え、肥料を減らしてきているという声もあるとのことであった。また土壌分析については最近試験場の協力を得て測定データの相関が高いということは分かっており、かなり有望なデータが取れているそうである。さらに、施肥による地下水の硝酸態窒素汚染はどうかという質問もあったが、これについても町内の取水場2箇所でのデータから、飲み水に関する影響はないというお話であった。

4. おわりに

読者の方もご存知であるかもしれないが、見学後の時期に、北海道の他地域でのいわゆる酪農実習の受け入れでトラブルがあったという話を耳にした。新聞等のメジャーなメディアではあまり大きく取り上げられなかったが、一時期ネット上では非常に悪いイメージを伴って情報が飛び交っており、話半分といえども色々な「実例」なるものが次々と紹介されていたのである。

今回見せていただいた鹿追町酪農の実例は、それとはまったく違っていた。その詳しい理由や構

造などは、この稿や、以降の講演や総合討論からも読み取っていただけるのではないだろうか。

なお、見学当日の昼食は、「観光農園にしかみ」さんのログハウスレストランで鹿追蕎麦のランチをいただいた。実はここも蕎麦だけでなく地元産にこだわった食材を供されており、ソーセージや野菜などバラエティに富んだメニューとともに、鹿追のスタイルを味わうことができた感があったことも記しておきたい。